で主体的に陣痛を乗り越える力ができるということを確認しました。よいお産に向けた準備は、妊娠期間が一番大事。主体的に自分の心身を管理していき、妊婦さんのセルフケア行動を育む方法として母子健康手帳を活用していく。私たちももちろん、何もなくても妊婦さんと関わりはできるんですが、ゼロからというよりは妊婦さんがある程度考えていらっしゃるほうがどんな健診や関わりをするときもしやすいということもあります。また、短い生活時間のなかでポイントを置いた指導もできます。母子健康手帳は妊婦さんと医療者が共有する情報です。活用しやすく、母子健康手帳を改訂していきたい。改訂案を作成しました。妊婦健診で、母子健康手帳をツールとして医療者と妊婦の対話ができるように、コミュニケーションができるようにしていきたいなと思っています。双方向のコミュニケーションによって、妊娠している女性を理解して温かい健診になり、医療者、患者間の信頼がより深まる、そういうツールとして母子健康手帳を活用していきたいなと思っています。6ページというページ数がネックだと思いますが、ぜひ改訂の際には入れていただきまして充実した妊婦健診ができるようにやっていただきたいなと。こういう感じで生まれてきた赤ちゃんは、元気な産声が聞こえてきそうですが、この裏には妊婦さんの40週という長い時間の対話の努力、この赤ちゃんを健康に育てるという努力があったかなと思います。そして授乳、こういう健康な赤ちゃんを産むための、こういうふうに育児をしていく、そのもとになる妊娠中の健診、その健診をよりいいものにするために、母子健康手帳の改訂、頑張ってやってきたなと思います。ご静聴ありがとうございました。

【司会、松田】

ただ今の演題について聞きたいという方はいらっしゃいますか。それでは、のちほど議論していきたいと思います。

お二方の医療関係者の方から発表をしていただきましたが、皆さん、私たちの熱い思いが伝わりましたでしょうか。現状よりもっとよくしたいと思っていて、皆さん方からいろんな形で情報をもらっていいお産をやっていきたいと思っておりますので、そのあたりのことを含めまして最後に質問を受けたいと思いますので、よろしくお願いしたいと思います。それでは次の方に。後半は、お二方の女性からお願いしたいと思います。最初は、河合蘭さんからお願いします。出産に関するジャーナリストで、この場にいる方で知らない人はいないと思います。よろしくお願いします。

【河合】

ありがとうございます。過分のご紹介をいただきまして、知らない方もたくさんいらっしゃると思いますが、自分の出産を機にいろいろ考えて書いたり調べたりしてみたいなと思い、お産の記事ですとか、本とかインターネットとか、いろいろ書き散らしております。物書きです。

私自身は、先生方とは違いまして、研究班の一員ということではなくて、松田先生から思うままにということで、母子健康手帳をこれからどんなふうに改訂していったらいいかを話してほしいとリクエストをいただきましたので、フリーにいろいろと日頃感じていることを、取材活動や、また自分の出産体験などから感じてきたことをお伝えしてみたいと思っております。私は情報屋なので、母子健康手帳の持つ健診における意味というよりは、少し情報のひとつとして母子健康手帳をみてお話したいと思っております。

妊婦さん側を取り巻く情報源というのは、非常に多様でして、ありすぎるんじゃないかという声もありますが、あるようでないんじゃないかなと思います。種類としてはいろいろあって、行政からいただく母子健康手帳、それからいろいろな教則本というものも出されているかと思いますし、それが一番硬いものだとすると、柔らかいものはネットからどんどん落ちてくる。検索すればなんでも手に入るような状態で、一般の方のブログなんかも非常に豊かになってきている。私は、マタニティ誌のライターからこの仕事を始めたん

ですが、25 年くらい前ですかね、当時は突然マタニティ誌がたくさんできて、だんだん淘汰されてきましたが、いまも昔も一番多分みんなが耳を傾けているのが先輩ママの話です。お姉さんが産んだなど、直に人から聞く話。そして診察で先生、助産師さんから聞く話が情報の主なものです。

そのなかで母子健康手帳というのは、情報源としてどういう特別さを持っているかなということを糸口として考えてみました。これは妊婦健診というリアルなものと一体になっているもので、他の情報源と大きく違っている。記入していくことで、世界でただ1冊の自分の本ができていく。お産の物語ができていく白い本が母子健康手帳といえるかと思います。それにいろいろな情報がくっついている。記入されて、その子が大きくなっていった暁には、これは本当にお母さんと子供の宝物、火事のときに持ち出したいような大切なメモリアルになると思います。私も初めて妊娠したときに、母親に自分が胎児だったときの母子手帳を初めて見せてもらいました。「これあげる」と言われて、それを開きましたら、ああ、本当に私はこの人のお腹のなかにいたんだ、ということを何よりも実感したのを覚えています。その女性のお腹にその子がいたという証だと思います。そして医療者との交換ノートですから、やりとりが楽しい。ちょっと書き込んでくださる、数字だけではなくて書き込んでくださるものを何回も眺めたりもいたします。

仕事柄、記載をする以外のところの情報にフォーカスしていきますが、母子健康手帳に書いてある情報は、他のマタニティ誌であるとか、お産本であるとか、ネットであるとか、妊婦さんの周りにあふれている情報とかなり違った重要な情報だと思います。というのは、国が出している、あの小さななかにエッセンスとしてこめる情報ですから、ものすごく重みがあって圧倒的な信頼感があって、母子健康手帳にこう書いてあると言えば、それはもう権威ある声なんだと思うんですね。正規のものであるという感じがいたします。そして、国がこういう方針で母子保健をやっていきたいと思えば、ここに書けば伝わっていくわけです。そういう道筋、道なんだと思うんです。そしていま、母子保健のやり方、お産のやり方、母乳なんかも、一世代前とものすごく違うわけですね。そのために、妊娠中から、あなたそんなことしていいのということをおばあちゃんたちから言われ、子育ての対決の場をつくり出しているということも起きている。でも母子健康手帳にいまこう書いてあるよと指し示されれば、それでもなおかつ頑張る、30 年前のやり方を主張するというおばあちゃんはあまりいないのではないかなと思うんです。だから、ここに、30 年前とは違う今の定説である確かな情報をしっかり書いていただくと、いろんな意味でとても助かりますね。そしてそれが全員に渡される。これも大きな特徴ですし、斎藤先生もおっしゃってましたが、割と妊婦さんたちはきちんと真面目にいつも、旅行に行くときも真っ先に保険証、母子健康手帳をといって持って行って、いつも持っている。必ず入っている。ともに行動できる小さな手帳であるという意味でも、母子手帳は他にない情報源なわけです。

一つずつその特徴についてお話していきたい。まず、これは正規の情報ですよということが伝えられるという意味では、非常に私は色々書いてもらいたい。あまりたくさん書いても読んでくれないかもしれませんけれど、でも書いてほしいことが色々あります。たとえば、先ほどから出ている超音波検査は、どういうものなのかということが全く違う意味で妊婦さんの中に入ってきていると思います。赤ちゃんの顔を見て楽しむもの、いま妊婦健診が楽しいって超音波で赤ちゃんを見ることなんですよね。ほとんどの場合。ところが、その超音波検査で先天異常がわかったり、妊婦健診が始まってまだ先生の顔をわからないようなうちに、先天異常のサインになるようなものについてお話があるということも、最近は勧告が出て少し少なくなってきたようですが、つい最近までよくあったわけですね。超音波検査とは何かということ、これがしっかり謳われているといいなと思います。まず、第一義的には、こういうことによって赤ちゃんの健康さがわかるということ、次にそういうとても衝撃を受けるような情報も得られてしまうものだということ、そしてもちろん、赤ちゃんとのつながりを作れるような楽しい時間でもありますよと。3Dとか4Dの機器も登場しているとか、赤ちゃんの血流も見えるんですよとか、羊水が量れるんですよとか、内臓も見えちゃうとか、そういうことをここでバンとお伝えしておくといいかなと思いま

す。

いま本当に報道がたくさんありますが、新型インフルエンザの予防注射、これも妊婦さんにとってはどうなのかな、不安がある方もいらっしゃるんじゃないかと思いますが、皆さん妊婦健診をなさっている先生方、助産師さんはいかがでしょうか。インフルエンザの予防注射は、妊婦さんはしてはいけないと言われてきましたよね。妊婦さんは何をするにも、これはいいのかなと思いながら日々暮らしていますよね。していいこと、悪いことというのは、マタニティ誌の数ヵ月に1回は繰り返しているといっていいくらいの一大テーマでして、こういうことも大切な情報だと思います。

授乳のやり方も病院によって違う、病院のなかで助産師さんによって違う、母乳はいろんな人がいろんなことを言うからもういやだ、という方もいらっしゃるくらいです。ここはいろんな意見があるけれども、これがスタンダードですよ、定説ですよというところくらいは、しっかりと書いていただくといいかなと思います。いろんな専門家からいろんなことを言われると妊婦さんが混乱してしまいます。標準化ということをしていこうということを産婦人科の先生たちが診療ガイドラインの作成を始められていて、今度助産師さんのガイドラインもつくられるそうですが、それをできたら産む本人たちにも伝えるルートをつくって欲しいなというのが私の願いとしてあります。イギリスでは、各科の診療ガイドラインをつくる「ナイス（National Institute for Health and Clinical Excellence）」と呼ばれる国営機関があるそうで分娩の扱いを決めたものもありますが、そこでは妊婦さん用にきゅっとコンパクトにしたものもあって、言葉も専門用語は使わないで噛み砕いて書かれているんですね。そういうことを知りたい方はたくさんいます。

私は、この間、帝王切開を受けた方のサイトを取材したんですが、VBAC（帝王切開後経腟分娩）のことをみんな知りたいと。先生がこんなこと言った、こっちの先生はこんなこと言ったよ、とサイトでワーワーずっと言っている。私が、この間、ガイドラインができてね、一応見解がはっきり示されたのだけどと言ったら、誰も知らないというわけですね。帝王切開について一生懸命、10 年間やってきた方が知らない。これは本当にもったいないことだなと思いました。

また、母子手帳の役割として国の方針を伝えることができるとさっき言いましたが、やはり松田先生も斎藤先生もおっしゃったとおり、いま日本のお産が大変危機的な状況にあって、またこれが 10 年間続くであろうと言われていますけども、いままで同じことをやっていて医師だけ増やせばいいとか、医療費だけ増やせばいいとかいうことではないだろうと思います。システムを変えていこうということで、新しいシステムがたくさん出てきています。これをわかりやすく母子健康手帳に書いていただいてはどうだろうと思います。まず、リスクスコアというもの、松田先生がお話なさいましたが、リスクによって出産場所を分けていくのは当然のことと思いますが、周産期という名前からして妊婦さんたちが日常に使う言葉ではない。周産期システムというのは、どういう概念なのかということが一般社会に入るには、母子健康手帳はいい場所だと思います。高度周産期施設でお産をしましょうと言われても、それはどこ？という感じなんですね。じゃあ、この市立病院は高度周産期施設なんですかと、あっちの国立病院はどうなんですか、NICU があるのはどこなんですか、というふうに一般の人からは分かりにくくなっております。

また、オープンシステムというのもずいぶん普及しているようですが、こういうことも母子健康手帳に書かれると、後押しができるというか。信頼できる、お国としてこれを取り組んでいこうと思っているシステムなんだということが伝わります。そして同様に、院内助産システム、これは看護協会で言っている言い方で一般的には助産師外来、院内助産院などと呼ばれているものですが、こういうものにつきましても、しっかりと権威ある母子健康手帳に記載していただかなければいけないかなと思います。話は、そもそも助産師さんはどういう職業なのかというところからです。だいぶ助産師さんについてはわかるようになってきたとは思うんですが、私が妊婦さんとお話していると、助産師さんって看護師さんなんですか、と言われます。少し年配の方になりますと、お産婆さんに弟子入りして修業をした人だと思っていたりもします。非常にお産婆さんというキャラクターが強い

んですね。そして産科医療補償制度、これも全然浸透していないような気がします。医療訴訟以外の形で脳性まひのお子さんにアプローチされるものができるのはとてもいいことだと思いますが、専門家でも難しいくらいとても複雑なシステムになってしまって、申請用紙を見ても私は一体誰に名前を書いているのかわからないと皆さん思うんじゃないかなと思うんですね。

10 年に一度の改訂で、ここまで今どきの話題を盛り込んでいくというのは大変なのかもしれませんけれども、簡単に取り換えられるような、たとえば挟み込みのようなものにするとか、そんなものもあり得ますし、もっと「国からのお知らせ」として母子手帳をとらえてもいいかなと思います。

それから、母子健康手帳はいつも持っているもの、どっかいっちゃたよということがないものです。お産の本などは、誰かに貸しちゃったとか、どこにあるかしらと探すんですけど、母子健康手帳は探す人はあまりいなくて、さっと出てくると思うんですね。そういうことをイメージしますと、母子手帳には、危険を回避してくれる最低限の救急箱みたいな情報があったらいいと思います。妊娠中のリスクの情報がないというお話がさっきから続いていますが、本当にそう思います。こんなときはすぐに受診か、明日の朝まで待っていいのかな、救急車を呼ぶべきなのかな、そういうようなことがチャートになっていると便利だと思います。先生たちが作ってくれるとよかったんですが、なかなかチャートは難しいんですね。出血があった。色とか量とか、それによって分かれていくようなものをマタニティ誌ではたくさんつくってきました。だいぶいいものも出ていると思いますけれど、それがさっと出てくるところにあったらいいなと思うんです。あの雑誌の何月号にあったけれどどこにあるかしら、では困ります。

それから、お産の始まりのあたりに女性たちの不安は集中しております。だいたい、陣痛というものがどんなものかわからないから、陣痛がきたらわかりますかというところから始まるわけです。皆さん、結構心配しているのが、家で生まれそうになったらどうするの？　タクシーのなかで生まれそうになったらどうするの？　ということがありまして、また昨今の事情から集約化によって産む場所がだんだん遠のいていくということもあります。全国に配られる母子健康手帳ですが、今の日本には車で 2 時間ゆられて産みに行く方もいらっしゃいますのでね。アメリカ並みに車中分娩、アクシデンタルな自宅分娩に備えられるような何か最低限の情報がここにあってもいいのかなと思います。そこがさっと開けるように、緊急情報ページは端が赤くなっているとか、ぱっと取り出せるようなタグみたいなものがついていてもいいのかなと思います。こういうときには、人の声でアドバイスをしてもらいたいという方も多いと思うので、困ったときにぱっとかけられる電話とか、もちろんかかりつけの産院もそこに電話が書き込めるといいと思いますけれども。あとはお薬を飲んでもいいのかどうかというのも一大テーマなので、そういうのもあってもいいかなと思います。

あとは 10 年改訂では難しいかなという話ですが、最近めきめき関心が高まっている妊婦さんが欲しい情報としては、こういうことがあるかなと感じています。私が妊娠したら産む場所はあるんだろうか。お産難民などという言葉も聞きますよね。周りに妊婦さんがいない人も本当に心配しています。私は、その地域の母子保健に責任を持つという保健センターであれば、母子健康手帳を渡すときにそこにすんでいる妊婦さんが通える範囲にどんな出産施設があるのか、いま分娩を取り扱っているのかなどを伝えてあげて欲しいと思います。ここは健診だけをやっているとか、ここは周産期センターなんですよと、ここだったらこれくらいの早産の赤ちゃんも受けるんですよとか、そういうことをひと言添えて、ただ病院の名前、電話番号が分かるようなものでなくて、どんなふうな顔触れの出産施設群があなたをサポートしているのか、そんな情報を渡していただきたいなと思っております。電話をすると割と教えてくれるようなんですが、情報があるのであれば、ぜひ紙にして渡してさしあげたいなと思います。

それから、高齢出産の増加とともに、羊水検査や詳細な超音波検査の増加もあります。、それはどんな検査なのか、まだきちんとした情報が出ていないような気もします。また、

陣痛が怖いといった方が増えている。これは私としては残念なことですが、無痛分娩であれば出産する勇気があるという方もいらっしゃいますので、こういう情報もいるのかなと思います。それから、私は脳出血の可能性があるのかないのかということをおっしゃる方もいらっしゃる。こういったところがいま注目される、ネットなどにあげると注目される情報ですね。

これはアイデアというよりは、なんとかこういうものが込められたらなあという気持ちですが、母子手帳をパラパラとめくると、帝王切開の人はどこに何を書くの？と思いませんか。そもそもお産の情報があまりにも少なく、お産と産後で１ページって、それはないだろうって思うんですけども、帝王切開の方はもう除外しているような手帳かなと思います。いま、病院では５人に１人はいる帝王切開の方たちが、きっとさみしい思いをされているのではないか。帝王切開の方たちに聞きますと、いろんなお産の情報源にアクセスしたときに、帝王切開の情報があまりにも少なくて、疎外感を感じるとおっしゃるんですね。情報がなくて困るというのもありますが、避けられてしまったような、傷つきのようなことをおっしゃる方が結構いらっしゃるんですね。また、私は不妊治療で妊娠したという方も同じようなことがあるかなと思います。私の赤ちゃんは早産で生まれた、病気や先天異常を持って生まれたというお母さんに対してはどうだろうか。そういうことも考えていくと、現在、多様な妊娠の方法がある、道筋がある。そしてお産も多様化している。そのなかで、すべてのお母さんと赤ちゃんを歓迎しているような手帳が必要なのではないかなと思っています。もちろん、帝王切開を避ける、早産を避けるというための母子健康手帳なんですが、どうしても結果的にそうなってしまう方がいらっしゃったときに、その方たちにも大きなＯＫサインというか、肯定感を感じていただけるような工夫というか、何かがあったらいいなと思ったりします。親子の大事なメモリーなので、これは私のものだと思えるものにしてあげたいなと。

お産の情報が少ないということで、帝王切開の情報がないということなんですが、自分がどんな帝王切開をしたのか全然わからないという方が多いような気がするんですね。前の先生が見つかってなんとか連絡して情報をいただければいいが、見つからない方もいらっしゃるし、情報をもらえないという方もいらっしゃって、自分のお腹をあけていろいろ処置を受けたのにその記録が何もないというのはいかがなものかと思う。逆に術子宮や経過が細かく書かれていた場合、今回のお産に対する母子健康手帳は、次に妊娠したとき、次のお医者さんにもとても有効なものになるかもしれない。そういう未来への考えもあってもいいかなと思ったりもします。

最後ですが、今日は医療者の方も多くきていらっしゃると思うのでお願いです。妊婦健診は医療者との触れ合いの場なので、ぜひ次の妊婦健診まで頑張るパワーがわいてくるような、また来たいと思えるような健診をしていただけるとうれしいです。そして、これからもっともっと赤ちゃんの異常に対する技術が進んでいって、たくさんの手段で異常に向かっていかなければならない健診になっていくかもしれませんが、こんないいところがあなたにはあるよと、そこも言ってあげて、そのうれしさも持って帰ってもらえるようにぜひお願いいたします。ありがとうございました。

【司会】

ありがとうございました。最後ですが、伊東敏恵さん、NHKアナウンサーとして活躍されていらっしゃいます。

【伊東】

ＮＨＫアナウンサーの伊東敏恵です。たくさんお越しいただき、ありがとうございました。医療関係者の方も多くいらっしゃるということですが、今日、いま妊娠中の方で来ていらっしゃる方は何人かいらっしゃいますか？　いらっしゃいますね。今日はぜひ母子健康手

帳をこう変えていただきたいというアドバイスとともに、妊婦の方にもぜひ、ちょっと先を歩いているものとしてお伝えしたいこともあり、今日は、主人が急きょ、広島に転勤しまして、いま広島に住んでいるんですが、朝一の新幹線でとんできました。今年の２月に、出産をしまして、いま娘は７ヵ月です。今日は父と母に預けて限られた時間、お話をします。今日は皆様方、たくさん資料をつくっていらっしゃったんですけど、昨日の夜、写真を 11 枚取り込むのが精いっぱいで、お手元に資料を配らず申し訳ありませんが、限られた時間ですがお話をさせていただきます。

母子健康手帳、河合さんの話にもありましたが、みんな必ず持っています。皆さんも、いま妊娠されている方も同じだと思うんですが、こういう母子健康手帳入れ、ポーチのようなもののなかに、必ず母子健康手帳とペンと写真証とか、病院の診察券だとか、とにかくこれひとつ持っていれば、何かあったときにお守り代わりのようなものにして常に皆さん持っていらっしゃると思います。大きさもちょうどいいですよね。多分、これ以上、大きくなったりすると、また持ったりするときにかさばったりする。厚さもいまこれくらいですが、本当に掌で片手でペラペラめくれる。さっき河合さんのお話にもあったが、いろんな副読本ではないけど、いろんなちょっとしたものを頂く時に、このようなカバーがついていると差し込めるのでとても便利。前、私は練馬に住んでいましたが、練馬区の副読本プラス、今度は広島で色々予防接種のうんぬんをもらってくる。ちょっとカバーがあると差し込んだりできてとても便利なので、細かいところなんですけど母子健康手帳、本当にうまくできてるなと思う。私の率直な感想でした。

今日の話のタイトルに、私は、「万能、母子健康手帳」と書かせていただいたんですが、すみからすみまで読みました。私はこれを読んで、育児本なんてわざわざ買わなくてもいいんだ、ここまでていねいに書いてあるとは思わなかった。本当に育児本、買わなかったんです。細かーく、産前の妊娠初期の過ごし方、歯の磨き方、イラスト入りで書いてあって、子供がこういうふうになったら病院に行きましょう、離乳食はこういうふうにしましょう、すみからすみまで読むとすべてのことが網羅されているんですね。育児本を買わなかったので、これ１冊で私はいまのところ７ヵ月の娘は元気に育っています。ただ１点だけ。よく生後１ヵ月後に、湿疹がパーとできたりしますよね。そのことだけが書いていなくて、１ヵ月のときにパーと舞い上がったときはあったりもしましたが、それ以外のことは本当にすべて書いてあります。

今日は、何点か、私なりに提言をしたいことがいくつかあるんですが、その大きなひとつに、もっとこの母子健康手帳を堂々とＰＲして欲しいというか、ぜひ皆さん、これ１冊でなんとかなります。１冊あれば大丈夫ですよ、ということをもっと上手に宣伝をすれば、妊産婦の方、いま本当にたくさんの情報に振り回されているんですね。ネットを開けば、右派、左派、いろんな意見があり、母乳についてもそう。そのなかで河合さんの話にもありましたが、一応国からもらったものにはこう書いてあるんだということが、これがバイブルになっていて、しかもそれ、妊婦の方、お母様、すみからすみまでしっかりと読めば怖いものはないよということを配布するときに、しっかり上手にＰＲすれば、もっと母子健康手帳が活用される。ただ配布してみんな持ってますだけではなくて、しっかり活用されるのではないかなと思っております。まず、母子健康手帳を上手にしっかりＰＲをして自信をもって配っていただきたいということ。

もうひとつは、記述欄、私たちが記述する欄があまりにも少なすぎる。自分の母子健康手帳を昨日手に取ったんですが、よく皆さんが妊婦の方が必ず書いてあるのが、体重の変化、うんぬんという欄のところに、特記する事項というところが唯一空欄なんですね。私は、妊娠したことがとっても嬉しくて、日々、自分の体がどういうふうに変わっていくかということをとにかく何かに書きたかった。本当は脈拍なんて書かなくていいと思うんですが、脈拍さえも書きたくなる。毎回健診で、自分の体を、こういうふうに変わっていく、脈拍の変化はあまり関係ないのかもしれないけれど、とにかく何か関わりたい。ここは何も書かなくてもいいんだよと言われても、やっぱり何か書きたいというくらい関わりたいんですが、いまの時点では出産前、妊婦の皆さんが何か書ける場所、自由記述欄が、ここ

と、もう１ページ、経過が書く２ページめからあるんですが、たったこのスペース２枚分だけなんですね。ここにフリースペースのようにしてあるんですが、ここに書かれているのは、０１２０－０１４５－０１５４－０２００、しかも何かすごく乱れたような数字なんですけど、痛みがきたとき破水して、よく本を読むと、左が何分おきにきたかをメモして１０分おきにきたら病院に行きましょうと。お腹が痛くなってきたときに、ちょっとメモ用紙、ペン、なんて言っていられない。私は、ああ母子健康手帳に書いておこう、そしたら絶対忘れないし、絶対病院にこのまま行けるかもと。そして記述欄を探して、ああここが空いていると思って、深夜１時２０分痛くなった。あ、１５分おきに痛くなった、もう病院に行こうという、いろんなことが書けるスペースは後になって、いまこうやって見ても出産のリアルな緊張感が沸々と思い出せるような感じで、やっぱり私たちも関わっていくことで、自分の意識、認識力がすごく高まっていくんじゃないかなと思います。産後は健康診断のところにいろいろと空欄があるんですが、妊娠中の空欄はあまりにも少ないんじゃないかなというのが率直なイメージでした。

これがよくある健診、これは確か６、７ヵ月健診のときの自由記述欄がここですね。育児の心配うんぬん。自由に記入しましょう。でも、ここで書いてあるのは、もっと私、これもメモがなくて、自由記述欄がなくて困って書いたが、保健センターなどで育児講座というのを無料で市や区町村でやってくれるんですが、そこに参加したときに助産師さんや保健師さんが話してくれた内容をメモしたりすることに使いたいんですよ。そういうときに、別のノートに書いてても、そのノートがどこかにいってしまうので、やっぱり育児情報というのは１冊にまとめておきたい。そういった意味でも、そういうことがもっと書けるスペースがここに。親になりたての頃はまだ意識もすごい高いし、もっと積極的にアプローチしたい、何か一生懸命勉強をして母として学んでいきたいというのが特に強い時期なので、ぜひ自由記述欄を増やしていただきたいですね。これは、娘が５ヵ月、７ヵ月のときに初めて発熱したときに、お医者さんに説明するのに、何時頃何度でしたか、いつ頃鼻が出てましたか、とか忘れないために書く場所はと。あ、自由記述欄がもうないんだと思って表紙の裏に書いたりして、それくらい白紙を増やせ、何十ページも欲しいと言っているわけではないんですね。数ページでいいから、とにかくこの１冊にほぼすべてが書けるくらいのフリースペースがあったらさらに助かるかなというのが、率直な思いでした。

ただ、フリースペースがほしい、私はたくさん書きたいという方に、私が唯一書くことを失念していた場所があります。それは、さっきも話がありました連絡先のメモ。

さっき、意識を高めると言いました。私が母子健康手帳をいただいてうれしかったことに加えて、これは練馬区だけじゃないと思いますが父子健康手帳をさりげなくいただいたんです。私はそれがすごくうれしくて、母子健康手帳という名前をもし夫が見たときに、あ、母と子の健康手帳か、やっぱり夫がよく言うんですけど、私が母乳をやっている姿を見ると、父親として一歩外にいるような気がしてちょっとさみしい気もするんだよなあ、と言ったことがあります。そういうお父さんを仲間に入れるためにも父子健康手帳をさりげなくいただけて、それを私がさりげなく、これあなたにいただいたから読んでと言えることが父親の意識も高めてくれるんじゃないかなと思います。結構書いてあるんですよね。すごく分厚すぎず、お父さんすごく読みやすいと思うんですよ。イラストもたくさん書いてあって、妻がつわりだったら台所で料理つくってみませんかとか、妊婦体操、二人だとこんなこともでいますよということまで書いてあったりする。ぜひ皆さん、これは練馬だけじゃないと思うので父子健康手帳は今後もさらに充実していただけると助かります。

もうひとつ言いたいことは、大幅な更新が10年、1992年、94年と更新はされているんですけど、何が新しい情報になったかというのがいまのままだと分かりづらいですよね。これだけ医療が発達して、これだけいろんな方々の発見で新たにわかったことがあるなかで、日々情報はさらに進化していると思うんです。だから母子手帳は、載せるべき情報はすごいスピードで進化していると思う。できれば、10年とはいわず、毎年とは言いませんが、もうちょっと細かい周期で更新されてほしいなと思います。もっと大事なのは、これが更新されましたという情報がこれだと変わったところがわからない。たとえば、よく

知られているのが、これはピンク色のは私の母の母子健康手帳で36年前ですが、昔の健康手帳には、日光浴をさせましょうと書いてある。私も義理の母にみてもらったり、ああ赤ちゃんは日光浴させなきゃ、生後5ヵ月の赤ちゃんを庭に連れ出して太陽のもとにさらされたときには、あの一健康手帳に書いてあるのでちょっとーと。母子健康手帳に書いてあるのでと。母子健康手帳に書いてあったから言えたんですよ。書いてないと、ほら、お母さん。昔は日光浴をしてくださいと書いてあったかもしれませんが、いまは、ほら見てください。いまは外気浴と書いてある。縁側くらいでいいんで、外気に触れさすくらいにしてくださいと。すごく言いやすい。そういうことが変わったよというのが、ちょっとした、たとえばアンダーラインが引いてある。あ、これは最近新しく変わったんだとわかるので、ぜひ改訂した部分もしっかりビジュアルでわかるようにしていただいきたいと思っています。

いま、働くお母さんもたくさんいるので自分一人で赤ちゃんを育てないんですね。親にみてもらったり、たとえばベビーシッターさんにみてもらったりするときに、母子健康手帳にこういうふうに書いてありますから、お母さん、こういうふうにしていただくととても助かりますとすごく言いやすいので、そういう面では考慮していただくととれもうれしいと思います。

今回、私がつけたタイトルに、「万能母子手帳＝成長の記録＋愛情の証」と書きました。私は妊娠中に母子健康手帳にいろいろなことをスラスラ書き、もちろん産後も健診ごとに体重が増えた、意味はないけど言葉が、うー、あーと、書けば書くほど愛情が再認識される。言葉は不思議なもので、感情としては、あー、だんだん子供が大きくなったなあと、それでいっぱいでも言葉に、字にすることで、その認識がさらに強まっていった。記入することで自分自身母親としての思いが、それが証拠として残るのがすごくうれしいです。そういった意味でもこれから母子健康手帳が、子供が生まれると時間が本当になくて、なかなか妊娠中のように細々書くことができないですけど、でいるだけ言葉にして残していってあげたいなと思っています。じゃあ、記述をしないとフリースペースをしっかり埋めないといけないの、そんなに私はメモ魔じゃないしなあと思わないでいただきたいんですね。私が今回出産するにあたって母に、私のときの母子健康手帳、見せてよと言って、引き出しから引っ張り出してきてもらった。うちのお母さん、どういうことを書いてくれてるんだろうとドキドキしながらページをめくりました。1ページ目、母のていねいな字で書いてあるな、25歳で産んだんだ、ああ、とか、次のページをめくると、私は10月生まれですけど、健診したあといきなり9月なんです。36年前の健康手帳ってフリースペースが6ページくらいあるんですね。いまは情報がたくさんあるからそれに裂かれてしまっていて、フリースペースがなくなっていると思いますが、フリースペースに何も書いてないんです。書いてないから私への愛情がないとか思わないです。わずか数行ですけど4月28日、初めておっぱいが出たんだ、5月29日に胎動を感じたんだ、この6文字で、この筆圧というか、その字を見ただけで、母の愛情を直接目で確認することができるんですね。決してフリースペースをすべて埋めるほど、母子健康手帳をていねいに書き続けることがすべての成長の証、愛情の記録ではない。けれども、こういう書きたいお母さんがしっかり書き残せるようなスペースがぜひたくさんつくっていただきたいと思っています。

後半の討論でもまだまだたくさん言いたいことがありますので、お願いいたします。ありがとうございました。

【司会】

20分間の休憩をとります。ぜひ具体的な質問内容をたくさん書いてください。後半の質疑応答を盛り上げていきたいと思います。午後3時5分から始めます。

◆　参加者からの質問事項（総合討論前に回収した自由記載内容）

・合併症のリスクが上がることを書くことも必要だが始めから正常経過を否定されているイメージを与えそうな気がする　ローリスクの妊婦を助産師が健診をしているところもあるのでは？
・在日韓国人の妊婦さんはしっかりと母子健康手帳をもらえてますか？しっかりと情報提供をされてますか？それを含めてほぼ100％の人が母子健康手帳の所有率なんですか？
・妊婦日記が書けるような母子手帳があったらいいなと思う。
・保健師として日々業務に就いており母子健康手帳を見させていただく機会が多く有ります。確かにフリーペースが少ないと感じています。講演をお聞きする中でなるほどと考えさせられる部分が多くありました。参考になりました。
・月刊母子保健で母子健康手帳の特集があり興味深くしておりました。もっと広く母子手帳を知ってもらいしかも活用してもらうにはどうしたらよいのだろうかと考えていました。河合先生の立場でのお話はうんうんと頷けるものばかりで妊婦の情報としてとても参考になりました。母親学級などでもっと母子健康手帳の大切さを伝えていきたいと思いました。伊東アナウンサーの熱い思いも良く伝わってきました。
・母子健康手帳というネーミングではなく親子健康手帳になるといいなと思っています。一部の市町村ではネーミングが変っているようですが。母子健康手帳は日本発のものであると伺っています。現在では様々な国で実用化されていますが、母子健康手帳の活用に関してはどのようにお考えでしょうか。（モロッコの女性健康手帳 15 才～利用できるもの、母子手帳をわかりやすくする色づけ等）
・産後うつが多いように感じているのですが、出生後の欄に EPDS の評価欄を作るなど、メンタル面での支援があるといいなと感じております。母子手帳に喫煙や飲酒など嗜癖への注意喚起も良いきっかけになるのでもっと書いてあると良いと思います。
・妊婦自身の記入が増えることについて大賛成です。本日聞いた内容①出産時の本人と家族の記録スペース、②妊娠中の体作り同様、産後の体作りのすすめにイラスト入りを加えて欲しいです。子育てを前向きに母親～家族～地域でしていく視点は今後特に必要だと考えます。
・当院では母子手帳は妊婦自身も色々書き込みしましょうと働きかけていますが、連絡先などの記載さえない場合も有ります。また書いてもらうのがサービスと思っていて、自分で書くのはサービスが悪いと感じていらっしゃる方もいます。どのようなアプローチをすれば主体的に母子手帳を活用できるのかお考えをお聞かせいただければと思います。
・一回の妊婦健診での記入欄が少ないと感じました。週数と注意事項が一緒に見られたほうが良いと思います。しかし厚くなったり重くなったりするのは困ります。父子手帳は知りませんでした。もっと広まると良いと思います。居住圏の病院を詳しく知らせるサポートについて賛成です。
・インフルエンザの予防接種を受けても胎児に影響は本当にないのか？専門的なことが分からないだけに健診は医師にしていただく方が安心というのはあります。ただ、妊婦自身も自分の体のことについてよく知って自身で気をつけることも必要だと思いました。トリアージは医療現場の負担を考えるとやはり必要なのかと思いました。父子手帳はあった方が良いと思います。川崎にはありませんでした。
・保健師より：保健センターでは母子健康手帳を交付したり、母親学級などで母子健康手帳の使い方などの講義をしております。その際に、より良い説明や内容を妊婦たちに提供できるよう、今回はヒントが頂けると思い参加させて頂きました。また今回お話を聞かせていただき父子手帳の導入やもしくは母子手帳の中に父のための欄をプラスし、「両親手帳」などにしていくことも考えていけるのかなと思いました。
・保健師勤務 20 年になります。母子健康手帳が極めて個人的なメモリアルと認識していましたが、数年前から入園入学時に提出を求められ、不利に作用すると聞いて、Dr も親もマイナス点になりそうなことは書かないようになったと知りました。本来目的に限定す

るよう学会等で申し入れてもらえないですか。
・私の勤める病院は電子カルテのため、災害時にシステムダウンする可能性が高く、ダウン時に診療がスムーズに行えるようにするために、母子手帳が活用できるのではと思ったのが参加のきっかけでした。毎回の診療の内容が過不足なく、また妊婦のリスク因子なども把握できるような内容になると良いと思います。
・災害時の医療者の妊婦情報把握という視点もあるといいと思います。
・成長曲線のつけ方、使い方に関してもっと広めてみてはどうでしょうか　出産後の定期健診時の利用や応用について考えて欲しい（そのツールとして母子健康手帳を）
・電子化は検討していますか？情報の統一の観点からある程度の基準（ガイドライン的）記載が必要であるが、医療が均質でない日本の状況からは難しいのではないか？分娩の状況、情報を正確に記載したいが、妊婦のすべてがそれを望んでいないように思いますが、（特にバットニュースは）いかがですか？
・妊娠の経過欄に記録を書かない医師がいます。何故こういうことが起こるのでしょうか？
・母子手帳に妊娠中については6ページのみの情報量であるという点が衝撃的でした。母子手帳に自ら判断するセルフコントロールが今回の改正ポイントであると思うのですが、その使用方法について（PR を含め）普及させる場が必要であると感じるが、その点はどう考えているのか？先天異常、羊水検査、クアトロテストなどの関連検査については？超音波検査がルーチンとなっている点は、日本の妊婦検査の特殊性があると思います。相談窓口として、遺伝カウンセリングなどの記載は考えていませんか？
・母子手帳は、現在発行されているものと自分が生まれたときのものとを比較すると、情報の量が大分多くこんなことまで書いてあるのかと思った。情報に振り回されているという話があったがまさにその通りだと思う。現行のままでも十分すぎるのではないかという思いもあるが、新しく必要な情報項目として本当に必要なものは何か？これ一冊で十分という伊東さんの話のように一冊の中身を吟味して欲しい。情報はあるとありがたいが多すぎると選ぶ範囲が多すぎ必要なものを見落とさないか、それがかえって心配になる。具体的なバースプランなどよりもっと自由で手軽なフリースペースがあった方が活用し易いと思う。面倒くさい人は書かないし、書きたい人は自分でノートを作ったりすると思うので必要ないのではないかと思う。
・私も父子手帳に興味があります。マタニティクラス等でもお父さんも妊娠にとっても興味を持っていると感じますし、逆にうまく関われない夫もいると思いますが、新しい母子健康手帳に父親記載の欄等考えていたりしますか？
・要望です。児童虐待の方向から考えると、0才児に実母から受けている件数が6割と一番多いのが現状です。育児ストレスが大きくなったとき、子どもを虐待しそうになったときのSOS先を是非入れていただきたいです。

<u>（　皆　）さんへの質問</u>

・母子手帳は誰のものでしょうか？実際に使うのはお母さんですが子育てが一区切りつき、母子手帳を使用しなくなった後、その手帳は子どもの手に渡されることが多いと思います。ベトナムの母子手帳には最終ページにこう書かれています。「あなたはこれだけ多くの人（親や地域や医療者など）に支えられ育まれてきました。だからあなたの命は大切な宝です。これからはあなたが、地域や親や周りのために活躍して下さい」命の大切さ、自分への価値を大きくなってから再認識するツールとして使えるようにしたい。
・妊娠中からセルフコントロールが身につくことはその後の育児になっていくうえでも重要と思います。一方出産がゴールとなってしまって、関心がそこに重点を置かれている感も否めません。良いお産がその後の育児をポジティブに、また子を一人前に自立した大人に育てていけるようになっていくために手帳というツールをどのように支援システムを作るのがのぞましい望ましいかお考えを聞かせて下さい。

・助産師より　出産の状態、出生の状態というスペースに異常の有無やアプガースコアなどある程度詳しく記載するのは必要なことだと思うのですが、お受験に影響するなどという理由で記載していません。この件に関してどう思われるか？
・何故母子手帳は全国的なものなのに市によって表紙や大きさなど違うのですか？父子手帳ははじめてみましたが今は全員に一緒に渡されるのですか？
・各病院によっては妊婦健診費に大きな差があり、区民の方が問題視していることがあります。どうして同じ健診でもこのような診療代差があるのでしょうか？

（　松田　）さんへの質問

・低出生体重児が増えている中で最近 SGA 性（small for gestational age）低身長性の成長ホルモン治療の保険治療が日本でも認可されました。体重身長が小さく生まれた子の一部がその治療対象に該当しますが、治療は３才からの適応となります。出生時の情報として追記できるような欄を母子健康手帳に入れていただければ、家族や医療機関の共通認識となり３才以降の治療を希望する際にスムーズに行くのではないかと考えます。
・妊娠のハイリスク評価は妊娠する前から必要なことです。妊娠してからハイリスクかローリスクかどうかではなく、妊娠前の女性への啓蒙が必要と思います。どうしたら早くからそうした情報が伝えられるとお考えですか？
・自分が何の検査をされたか分からない人もいます。血液検査結果等を貼っている場合もありますがそのような欄も増えますか？経済的な不安を抱えている方も増えているように感じます。そのような相談先についても記載して頂きたい。

（　斉藤　）さんへの質問

・配布いただいた妊婦の各期における確認項目は、妊婦が健診受診前に記入するものとしてもとても有意義なものと思いました。是非初期に喫煙について入れていただくとありがたいです。今年度の妊婦健診検査項目内容の改正により、医療機関などにおける保健指導内容が充実されました。是非、どのような保健指導（例えば食事、体調管理）がされているかという記載についてもお願いしたいです。
・妊婦のセルフケアを育むための母子手帳といいましたが、具体的にはどういうことか？健診結果の正常値、異常値を記載されることで自分の異常を確認でき Dr にアドバイスを求め、セルフケアの行動が取れると考えますが如何でしょうか？
・勤務医より：病院で提供できる医療体制は限られています。既に夫の立会いまでは可にしていますが、どのような具体案を考えているのでしょうか？（例えば希望帝王切開なども考えられるのでしょうか）
・保育所運営しています。「母子健康手帳」に記載されている 5～6 ヶ月が離乳初期というのは少々早すぎないか？子どもたちのアレルギーに原因しないのか？という相談を受けます。その人は「西原克成先生」という方が書いた本をお読みになっているようなのですが。離乳の開始時期について現在 5～6 ヶ月とした根拠を含め、先生のお考えをお聞かせいただければ幸いです。
・具体的に決まっている改訂のものがあれば見たいのですが。個人的には産科に勤務しているので、他院の検査結果の用紙など貼る欄などがあると落としたりなくしたりしなくて良いのではと思います。
・理想の内容としては様々、どんどん増えて、手帳としては何頁が妥当と考えていらっしゃいますか？

（　河合　）さんへの質問

・ハイリスク出産の人を励ます情報で「帝王切開」の人への情報がないと言われましたが、

具体的にどのような情報が載っていたら良いと思われるか教えて欲しい。自分は今回も前回も帝王切開でしたが、情報がないことに気付いていませんでした。産後の体操開始時期などでしょうか？
・何でも情報が書かれてよいものではないと思う。本当に多くの方が望んでいるとは思えません。妊娠の形は色々で、それを一冊の手帳に書けることが嫌な人もいらっしゃいます。子どもの入学時の資料として提出しなければならないことがあり、その情報を他人に見られては困る。細かな情報が書かれた医療機関間で情報交換できるものがあっても良いと思いますが、それは別冊などとしてあると良いと考えます

（　伊東　）さんへの質問

・母子手帳交付にかかわっています。母子手帳交付時、伊東さんがこれ一冊で大丈夫と伝える必要性をおっしゃっていましたが、その他交付の際に欲しい情報や声かけはありますか？

◆　総合討論
（注：質問したいシンポジストが明記されているものは、総合討論の前にあらかじめ当人に渡されている）

【司会、松田】

それでは、そろそろ総合討論に入ります。本日は79名の皆さまの参加をいただきました。質問事項が非常に多いことにびっくりしております。各演者の方々の質問と、全体に共通する質問を分けましたので、各論のほうからどんどん答えていきたいと思います。
　私への質問ですけども、「妊娠の経過欄に情報を書かない医師がいます。なぜこういうことが起こるのでしょうか」。できれば、今日の資料を配布してほしいと言われるのもありましたので、ＦＡＸで送ってもらったら、電子メールのアドレスを書いてもらったら連絡さしあげます。この方も、「各病院によっては妊婦健診に大きな差があり、区民のほうが問題視していることがあります。どうして同じ健診でもこのような診断の差があるのでしょうか」ということに対して、ひとつの標準化がされていないということはありまして、それを昨年、2008年、私たちは、先ほど、河合さんからもご紹介がありましたが、ガイドラインということで、少なくとも足並みを揃えようと、最低限の情報を決めようということをしていますので、それがまだ周知徹底されていないということもありますし、病院でみているリスクの重さが違うとか、そんなことも影響しているのではないかと思うんですけども、この点に関して、なぜ医師は書かないのかということに対していかがですか？

【斎藤滋】

私は医師の立場から、これはやはり書いた方がいいと思うんですね。僕も妊婦さんをみているときに、順調です、とひと言だけ書くんです。そして、それを見て妊婦さんはすごくうれしそうな顔をされるんです。順調ですと、ただそれだけなんですが、ちょっと気になることを書くと、先生、これなんですか？と聞かれますので、そういったこともありますので、われわれ医療関係者もこれは反省いたしましてできるだけ書くようにいたしますし、学会の先生方、助産師さんにもお願いして、ちっちゃなことでもいいですし、順調ですという言葉だけでもいいので、できるだけ書くようにいたします。これは、本当に貴重なご意見、ありがとうございました。

【中井】

日本医大の中井と申します。私も医師なんですけども、斎藤先生がああおっしゃるとちょっと言いづらくなるんですけど、母子手帳に対してメディカルレコードであるという認識があまりないんだと思うんですね。最初に松田先生が４０年前から変わっていないとか、尿たんぱくがどうとか、実はそういうのはカルテ、医療記録に全部示しておりますし、いまはカルテ開示というシステムもあるので、必要に応じて出すことができる。そういうこともあって、母子手帳そのものが、妊娠経過がたった２ページ、４ページ、少ないわずかなページ数であって、果たしてそれが医療記録なのかというところに、誰にも習いませんでしたし、概念的にそういうふうに持てないというか、なかったんですね。今後は私も気をつけようと思いだしておりますけども、今後改訂されて本当にそういうツールとして、妊婦さんと医療施設、あるいは医療従事者の情報伝達ツールだとすれば真摯に書き込まなければいけないと思うんですが、これまではそういう考えがなかったというのが正直なところではないかと思います。

【司会、松田】

それに比べて、伊東さん、河合さんからは、違うんだよ、すごく大事なんだよというとこと。ひと言ずつ追加願いますか？

【河合】

書いてもらったら、まじまじと何度でも何度でも妊婦さんは読むと思いますし、順調ですと書かれたら、にやっとするんじゃないかなと思うくらいに、伊東さんもさっきおっしゃっていましたが、その４文字の重みは、とても大きいと思います。

【伊東】

いま、いろんな情報手段で、妊婦さんにもいろんな情報が降り注ぐ、私もニュースで数字がわかっているだけにどんなに親しい先生とでも、松田先生にこれ以上迷惑をかけちゃだめだと、やっぱり聞けないんですよね。そういう言葉に残してもらえるというのは、それがきっかけで、医療のなかでわずか10分、５分でも、書くということは大丈夫なんだ、こう書かれたということはこういうことに気をつけないといけない、書いたことによっていまだったら聞けるかなとか、対話のツール、アイテム、重要なものになると思うので、大変忙しい業務のなかだということは十分私たちもわかっているんですが、ぜひこれを、こっちも妊婦もしっかり活用するのでぜひ残していただけるかなと思っております。

【久保】

国立成育医療センターの久保です。中井先生もおっしゃっていたんですが、多分母子健康手帳自身の歴史のなかでいくと、昔はもっと情報を書けた時代。たとえば、Ｂ型肝炎とか、いろんな問題で個人情報が流せない、たとえば小学校入学のときも出生情報が削られていったという歴史がある。だから僕たちが書いてやろうとしていても、結局、その個人情報をどうやって載せるか、検討するのかどうかという議論がある。書ける情報と書けない情報があるということですね。実は、僕は書く方なので、大量に書くとすごく怒られるんですね。それともうひとつ、これからどういう使い方をするか。それから医者の電子カルテがある。電子カルテに書くことで母子手帳に書かないということは最近すごく多くなっているので、メディカルレコードが必要であればそういう認識をみなさん持って、それが個人情報を含めたもので保護されていけばもっと書けるのではないか。

【司会、齋藤滋】

同じような質問が２通ほどきてまして、入園時や入学時のときに母子手帳の提出を求められて、いわゆる異常というところの欄を空欄にせざるを得ないという医療関係者側からの苦悩の、どうしたらいいのかということが出ております。これも個人情報と、あと個人を守るということもありますので、ここはもう少し大きな場所で議論していかないといけないと思うんですが、ただ医療的な大きな情報でもありますので、私たち医療関係者からすると記載をしたい、その記載をもって小児科の先生にまたみていただきたいという希望はあります。ただそれが、他の所で利用されてしまっているということで大きな問題が出てきつつあるというのも事実ですね。これ、河合さんなんか、どうなんでしょうか。一般の方からいって。

【河合】

受験の際に提出という、確かに、私も今日、正直申し上げて失言した話でした。不妊治療での妊娠とか、また帝王切開だったということもお子さんに話せないという方もいらっし

ゃいますよね。そういうことを考えますと、確かに難しい問題だと思いますけども具体的な個人情報だということなら、だからこそ本当はその人の医学情報を自分が持っていられるという意味が大きいわけで、そこを優先的に考えていくべきですよね。むしろ書くことの弊害を封じ込めることを考えて、受験に母子手帳を持ってこいと言ってはいけないと言うべきですよね。受験のために書いているのではない、お子さんとお母さんの安全のために書いているんですから、それは禁止するべきだと思いますし、そういう学校があったら名前をあげる。そう言った方がいいんじゃないかと思います。

【司会、松田】

電子化ということに対しても同様の質問が来ていますが、学問的には年間 100 万分娩をこれほど、胎児からずっと見ているところは少ないので、非常に貴重な状況にあるとは思うんですけども、公にしていい情報と、してはまずい情報をしっかり分けて、というのがひとつの作業として大事だと思います。で、この研究班では電子化はまだ時期尚早というのが厚労省の判断だったので、今回私たちはあえて電子化にはふれていません。

あと、胎児の発育曲線は、もう少し成長曲線のつけ方や使い方についてもっと広めてはどうでしょうかというご意見がありました。それから、母子健康手帳は全国的なものなのに、市によって表紙や大きさが違う。さっき伊東さんがハンディでいいですねと言ったが、実際はもっと大きなものもある。これは市町村に任されているから、主体性が。その市町村のコンセプトが違うからではないでしょうか。それに対して、どなたかコメントありますか？

【川鰭】

長良医療センターの川鰭といいます。今の、各自治体に任されているといっているのはその通りなんですけど、母子健康手帳を印刷している会社は２つか３つしかない。だから、もとをたどればということにもなるんですよ。ところが、各自治体で個々に工夫を凝らしたいというのも同時にありまして、さっき出てました受診券とうことに関しても、十何枚、それは統一はされているんですが、でも必ずしも全部統一はされていませんでしたし、そこに支給される金額もバラバラなんですね。私がいる岐阜県というところもいろんなところがいろいろ考えてくれていまして、人口が少ない、出産数が少ないほど予算をさくということになるので、私のところはローリスクの方はほとんど来られないので、自分たちのところからというのはない、途中から運ばれてきて外来通院してる方というのは券がバラバラですごい困る。それぞれに文句を言いたいんだけども、出してもらっているものに、それをやめてくれというのもどうかなというのもありますし。実際、いろいろ考えてくれているんですが、中身がめちゃくちゃ違うわけではない。なぜならば、印刷するところが２ヵ所くらいしかないし。表紙が違うのも、実はひながたがあるそうで、そのなかから自治体がいくつかのなかから選んでいるというのが実情。いろんなのがあるように思うけど、同じようなのが絶対出てくる。多分、それはある程度標準化はあると思うんですが、あとは運用なんですね。

さっきのお話ではありませんが、非常に印象的な話を地元の開業医さんから聞いたが、母子手帳は一切書かないと。どうしてですかと聞いたら、情報も書いてもらわないと僕らのところに患者さんが来たときに困るんですけど、と。そのときにはちゃんと紹介状をつける、それは病院間の患者さんだからするけど、不特定多数の人の目にふれるものに、そんなものを書くわけにはいかんと、何も書かんと豪語していらっしゃる。その先生は、周りから聞いてみると、書いていたことによってたまたま誤った記載があった。それをもとに非常に大変な目にあわれた、そんな深いトラウマがそんなことをさせている。結局、これがどういうものなのかという意義をもう少しみんながきちんと認識することが先なんでしょうね。さっき、斎藤先生が言われたみたいに、これを大事なものなんだよと、妊婦

さんにとっても大事なものであるし、われわれのメッセージを書くんだよという意識がもう少し定着しなければいけないし、そういう意味で、今回中身を変えるときに妊婦さんが自分の思いを書くことは大切なことだと思いますから、一番大事なもののところにそういうものを盛り込める、書けるような場所にしたいですね。小さいところに空いているから書いたとおっしゃっていましたが、あそこにボンと大きな判を押している先生もたくさんいらっしゃるので、すると皆さん書く場所がなくて困っているから、これも僕のほうでもう少しこれの使い方についてお話をしていかなければいけないかなという気もします。

【司会、松田】

先ほどの、中井先生のほうの話で、われわれ医師側はメディカルレコードとしての認識が足りなかったのではないかというのと通じますね。母子手帳にそれほど詳しく書く必要はないと思っておられる先生がたくさんいる。しかしながら、クライアント側のほうがからすると、もっと書いてよと、これはまさしく齟齬がおきるところなので、やはりわれわれの認識とかなり違うのだということをこの場におられる医療関係者はわかったと思いますけれども。どうぞ。

【金井】

信州大学の金井と申します。松本でもお産するところがなくなってきて、ひとつの分娩施設では受けられなくなってきました。実はこれくらいの大きさの母子手帳より少し大きいんですけど、母子手帳も入るくらいの大きさで、これがほとんどカルテに近いもので、妊婦健診は近くの開業先生で受けてもらってそのかわり、これに妊婦健診のいろんな情報が入っているので、夜中でもこれさえ持ってくればどこかでお産、診察してくれますという約束をしてつくっています。産婦人科が少なくなってこういうことをやって、負担をかけていると思っていましたが、これを去年の７月から始めて今年に入ってアンケートをとったら、自分が情報を自分が持っていることに非常に安心感があるということで 85％の妊婦さんはこの取り組みを続けてほしいと言っています。なので、これはちょっと大きいんですけど、今日の議論でいろんな情報を入れたいとなったら、医療者側からの伝える情報も増えるし妊婦さん側からもらう情報も増えるとすれば、今までの大きさ、厚みでは無理。これはバインダー形式になっていて、ちょっといろんな医療機関ごとに伝えたい情報も変わるだろうし、すぐに２穴の紙さえあればどんどん増やせます。毎年更新すれば完了です。母子手帳もこのようにしたらいいと言うつもりはないが、基本的にはこのくらの大きさで持ち運び、そんなに問題もなく運用できてますし、地域によってはいろんな違いもある。妊婦さんに伝えたいこと、その地域性もあるので、これだけ個人の多様化しているし、地域も多様化しているし、産婦人科も多様化しているとすればいろんなものに対応できるにはバインダー形式。ちょっと大きき重くなってもいいんじゃないかということを考えてもいいのではないか。

【司会、松田】

その情報を私にも教えてください。

【藤内】

大分県の健康対策課の藤内です。母子保健行政に携わるもので、いまちょうど母子健康手帳の調査研究をしておりまして、全国の母子保健担当者にお願いしてそれぞれの県の一押しの母子健康手帳を送っていただきまして、三十数冊の母子健康手帳が集まった。サイズがＡ６から、Ｂ６、Ａ５と３通りあります。ファイル式にしているものもあります。実は、

母子健康手帳は母子保健法の施行規則で、１ページから４９、５０ページ分の内容は法定。それ以外の任意的記載事項をそれぞれの自治体が工夫されている。一押しの母子健康手帳のなかに、どういう記述があったかというと、後半のいわゆる妊娠から育児に関する情報を全部、記録と時系列、妊娠中の情報と妊娠中の健診の記録が並べてあったり、お母さんたちが子供にむけてのメッセージを記録できるスペースをつくってあったり、いろんな工夫をしているのがあります。各自治体が、この母子健康手帳に対する思いがすごくあって工夫をしている。でもコアは全国共通でこういう部分は記載できるようにしようということが、こういうディスカッションから次の改訂に生かされていくのではないかなと思っています。

【司会、松田】

非常に貴重なご意見をありがとうございました。資料を私のほうに送っていただけたら。今日、午前中にそのあたりの話も出まして、前の部分はかなり敷居が高い。改訂には相当の努力を要するというのが厚労省の森岡課長補佐のコメントでありました。後半はかなり自由にできるが、ということがありましたので、10 年に一度だからこの際思い切って政権も変わったしやってみようじゃないかと思っております。

【斎藤滋】

無理かもわからないが、ぼくたちも正論というか、後半にやっているものは前半とずれている。前半と後半の部分が見開きで合うような形でなんとかできないかとお願いしてみるつもりです。ただ、なかなか敷居は高いとういことも聞いておりますので、どうなるかはわかりませんが。できるだけ、皆さん方にとって使い勝手のいいものにしたいと考えております。

【司会、松田】

私への質問をご紹介して、斎藤益子先生へ話を聞きます。「自分が何の検査をされたのかわからない方もいらっしゃいます。血液検査結果と貼ってある場合もありますが、どのようにして欄を増やしましょうか」。「妊娠への体力強化は妊娠前からのことです。妊娠してからのハイリスク、ローリスクことだけで妊娠前の女性への啓蒙が必要と思います」。ごもっともです。これは未受診という問題ともからんできて、今日午前中の班会議でもしましたのでここでの議論は差し控えます。

では、斎藤先生に。「母子手帳に自ら判断するセルフコントロールが今回の改訂のポイントだと思うのですが、その使用方法についてＰＲを含め、救済する場が必要だと感じますが、どう思っていらっしゃいますか」。

【斎藤益子】

こちらのほうにもひとつ、「セルフケア、家族のための母子手帳と言われていましたが、具体的にどういうことでしょうか」とご質問されています。

まず、私たちは医学から見ますと、たとえば健診結果で、正常値、異常値が出て記載されていて自分が異常となったときに確認できて、医師にアドバイスを求めてセルフケア相談に異常ではないですかというご意見も入っていますが、基本的には妊娠は健康な女性が妊娠した場合、あらかじめ予防行動をすることによって異常にならないように妊娠中は過ごしていけるような、そういうセルフケアを考えています。そういう意味では、自分の、先手、先手で健康管理をしていくということ。賢い女性は、たとえば自分が妊娠する前に予定を考えていつ頃妊娠したら育児に一番いいかということも含めて、妊娠計画から対応

するということがあると思います。そのあと、妊娠がわかりましたが、妊娠中、どういった行動に注意をすればいいかということをあらかじめ自分で勉強して、そういうものが現れくる週数にそれを予防するための行動をしていく。まずそれもセルフケアと考えているわけです。そういうふうにやっていっていますと、不可抗力のもの以外は正常、不可抗力というのは、前置胎盤。これはどうしようもないですね。自分が一生懸命管理をしていても、前置胎盤に変わるというのはいまの医学ではどうしようもない。たとえば、妊娠高血圧症、血圧がもともと親が高いとか、高血圧の家系があるとかの人は血圧が高くならないような、妊娠中はどうしていったらいいのか。まず、自分の血圧が高くならないように、健診で血圧が高いですねと言われる、そこからするよりもセルフでやっていくということです。

もうひとつ、非決定の欄。妊娠中の非決定の欄は当たり前のように読まれているかもしれないが、思春期の貧血も問題があります。もともと子供を産む女性は、出血が大きな影響のひとつですので、貧血にならないような食事あるいは食生活をそういうふうに改善していくといったこと。また、インフルエンザもはやっていますが、日常的な健康管理も予防的に、セルフプロモーションの考え方だと思う。このようにやっていくことによって、もちろん未受診はなくなるだろうし、経済的な問題は妊娠とは別として、妊婦さんが受診しなかったという未受診も、たとえば１０代の妊娠もあるが、そういうものも含めてなくしていいきたい。それで、逆に自分のプラス方向に考えてもらいまして、実際に妊娠して出産するとき、その４０週の間で自分の産むための体づくりをするという、もっと前向きな予防プラス強い意思、自分の体づくりをするという、そういう発想までつなげていきたいなと思っています。出産は非常に長時間の陣痛と分娩になりますので、それに向けてセルフケアをしていく。それからライフプランなども考えながら、異常の予防プラスより異常にならないための体づくり、より出産しやすい体づくりを目指していく。それが出産に向けてのセルフケアだと思っています。

【司会、齋藤滋】

それが大事だということをどのようにしてＰＲしていきますかという質問に対しては？

【斎藤益子】

まず、先生方、先ほど母子健康手帳にあまり書かれないとおっしゃったが、妊婦さんたちの質問項目という対話編を見ていただきますと、そこでたとえば、初期の段階で、つわりはありますか、妊婦さんがありますというと、つわりを軽くする方法、いつぐらいまで頑張れば大丈夫という情報、順調ですという言葉がすごくありがたいという話がありましたが、妊娠したときに妊娠おめでとうございますと初診のときにどれくらい言われるのか。妊娠おめでとうございますという言葉を聞くことによって、女性たちは自分の体は妊娠した体だということで、それにしっかり向き合っていこう。だからまずは妊婦健診の１回、１回で、最初からセルフコントロールは難しいと思いますが、１回ずつの健診の場でそういう肯定的なメッセージを出していく、そこから妊婦さんの意識が変わっていく。メッセージをたくさん出すことではないかなと、そでもちゃんと妊婦さんの顔を見て、妊婦さんの表情をうかがいながら、おめでとうございます、頑張りましょうというメッセージをしっかり出してほしいと思います。

【司会、松田】

斎藤先生、他に質問はありましたか？

【斎藤益子】

他のお２人からいただいているのに、健診のところに、喫煙？飲酒？に関するもののデメリットについて。確かに抜けていました。そういうところを初期の段階でぜひ入れてくださいということが入っておりました。それから、諸外国の母子健康手帳からの参考になるようなことはないかということだが、私は今年の夏ドイツに行きまして、ドイツの母子健康手帳は２人分、１冊に。上のお子さんの分を見ながら、次のお子さんの健診をしていく。同じページが前半と後半にある。だから日本の場合は育児編も入っているので大変分厚くなっていて無理かなと思うが、非常に分厚くなるのであれば妊娠・分娩編、育児編というように変える形になってもいいのかなと思ったりもしています。そうすることによって、妊娠中に持ち歩くものに関してはそんなに分厚くなっていない、お二人までみましょうというメッセージとともに、２人分というのがありました。

バースプランということで妊婦健診のなかで見開きで、ぜひここは妊婦さんとしっかり向き合ってほしいということで言われたんですが、産婦人科の先生からご意見をいただきまして、病院で提供できる医療体制は限られているということで、たとえば希望？帝王切開をバースプランとして考えてもいいでしょうかということをいただいています。私は、バースプランというのは、妊婦さんとパートナー、医療関係者、医師もしくは助産師があなたのお産をどのようにしていきましょうということで、その医療施設で提供できる範囲のことを明確に出すことだと思う。一方的に妊婦さんの言うことだけを聞くのではなく、いっしょにお産を考えていこうということで、このバースプランさせていただきたいと思っています。そうすると、帝王切開を希望している人が、たとえば自分が希望して帝王切開になるのはいいが、そうじゃないのに希望しているということが出た場合には、そこで帝王切開のリスクも話すことによって、いまの状態でできるのであれば自然出産でいきましょうということにバースプランを変えていくこともできると思う。自分の医療施設、自分たちスタッフがどのようなことが提供できるか、そしてあなたは何を思いますか、というところにバースプランを使っていけばいいのではないかなと思っています。

あと１点。児童虐待のことが書かれていまして、０歳児の虐待の６割が実母。虐待が非常に増えているなかで、なぜこうなるか。やはりストレスがお母さんを苦しめている。それが赤ちゃんにいく。それを考えると、虐待の問題を妊娠中からのお母さんの主体的な関わりで、減っていけるのではないかと思います。実際、私自身、シングルで育てる方とかも接したことがあるが、非常に環境がつらい、子供を育てるどころではないというお母さんたちがいらっしゃる。妊娠中から支える看護師さんのサポートがあることで、頑張ろうという気持ちになっていくのではないだろうかと思います。出産のときも誰も立ち会ってくれない。一人で産まなければならなかった、その母さんは。私に電話をかけてきました。私が妊娠中からかけていた言葉があった、それが耳の底にあってそれでがんばろうと思ったと。陣痛がきたときにも、先生の声を聞くと頑張れると思ったと。そういう医療者がそばにいることで、子供への愛情も深まっていくのではないかなと思います。虐待は、お母さんがしている場合は、お母さん自身も被害者だと。実は加害者であるけれどもお母さん自身も悲鳴を上げているんだということを考えて、私たちはサポートしていかないといけないんじゃないかなと思っています。

【司会、齋藤滋】

後半の河合さんと伊藤さんに、妊婦健診に必要な情報は、健康手帳には何が必要かということで河合さんから。非常に重みのある情報だ。国の良識ある情報なんですよというところを強調されて、あっと思ったが、逆にこの情報が氾濫しているいまだからこそ、母子手帳はもっともっとしっかりいないといけないというメッセージだと思う。その点に関する答えと、河合さん自身にきている質問をいくつか紹介もらえませんか？

【河合】
確かに、そういうふうにお伝えしたかったのです。他の情報源とは格が違うというか、重

みが違うというふうに思います。重すぎるから無難に何が書いてあるのかわらないようなものを書いてしまうということもあるかしれませんが、おかあさんたち、伊東さんもおっしゃってましたがすみからすみまで読んだんですね。本当に大事なものがあると思って一生懸命読んでいるということをお伝えしたかったんです。

印刷されている部分についてはそうなんですが、私に来た質問では、さっきの受験のときに持っていくと問題があるだろうという質問がひとつ来ています。それはさっきお話したが、その方の提案として別冊にしてあるといいと思うということです。さっき電子という提案がありましたが、医学情報は別冊としてわける方法も確かにあります。自分ではカルテを持ち、メモリアルとしてお子さんに渡すのとは別として妊娠経過が終わったら破棄したければ破棄することもできる。そのような形もあるのかなと、この方のご質問を読みながら思いました。ただ、帝王切開したことを出生の秘密みたいにしてしまうということ自体が辛いことですよね。すべての生まれ方について許容できる社会にする方が本当は大事。隠すことよりも、意識を改革していく努力のほうがずっと大事なんだろうなと思います。

もうひとついただいた質問が、ハイリスク妊娠を励ます情報についてです。帝王切開の方への情報がないということを言いましたが、この質問の方が自分が帝王切開だったが情報の不足を特に感じなかったと書いていらっしゃって、それは多分病院でいい情報提供がなされたために、不足がなかったのかなと想像して読んだが、たとえば、記載するとしたらどんな情報ですかと質問されました。そんなに詳しくなくてもいいと思う。病院からもいろいろ聞くことはできるでしょうから。でも、まず第一義的に、帝王切開という４文字があるということが励ましのメッセージになると思います。たとえば、いろいろ、一般的な正常出産の話があったあとに帝王切開の場合はここは違うけれどもこうしてくださいねとか。そういう形で帝王切開の方が、これは私の場合とは違う、違うと見ていったら最後に終わってしまったということがないようにという意味で言ったということを付け加えたいと思います。あえて情報としてどんなものが求められているかと言えば、麻酔はどんな方法なんですかとか、どういう種類があるんですかとか、どんな副作用があるかとか、副作用が事前の情報が足りないと、自分の体はどうなったのかしらと思って死ぬのではないかと思ったという方もいらしたので、事前にこういうことが起きるかもしれないということを教えてあげることも必要だと思います。母子手帳に書くべきかどうかはわかりませんが、術後の痛みが病院によって違うとか、人によって違うということもあるようなので、あまり痛い場合にはこうして、先生に言ってみましょうとか、そういうひと言もあってもいいと思います。

傷の情報はすごく少ないと思います。どんな傷になるのか、そしてそれがどんなふうに治っていくのか。美容的なこともあるでしょうけれども、いつ頃何ができるようになるのか、ほとんどの方は手術というものを初めて体験されるのではないかと思いますので、動けるようになるまでは、こんなふうに治っていきますよという情報もほしいと思います。傷の回復はものすごく長くかかります。産婦人科を卒業してずっと回復のプロセスを続いていくでしょうから、もっときれいになっていきますよということもニュースとしてさしあげてもいいのかなと思いますし、本当に辛そうな方でしたら形成手術みたいなものもあるんですか？実際にするかどうかは別として、そんなことも知りたい方もいるかもしれないと思います。あと、気持ちの上で帝王切開だったということによってうつうつとしてしまう方もいらっしゃるようなので、帝王切開もりっぱなお産なんだというイメージは強力に、バンと毅然としてお伝えしなければならないことかなと思います。

赤ちゃんとの分離。一緒にいたらすごい大変でどうしようもないんじゃないかと思っている方もいらっしゃるでしょうし、逆にずっと同室で母乳でやりたかったという方が帝王切開だからもうできないと不安に思っていらっしゃる方もいるので、同室、母乳育児あたりもお伝えしたほうがいいのではないかと思います。

【久保】